



第1回

連載開始にあたって
—富山大空襲からの生還—

土井 邦雄 群馬県立県民健康科学大学学長 / シカゴ大学名誉教授

1939年に、私は東京の荏原区で生まれました。父親は当時、逓信省に勤務していましたが、私が3歳の頃に北支戦線へ野戦郵便隊長として出兵しました。物心ついてからの父親の記憶は、出兵前に撮った私を抱えている父の一枚の写真だけでした(図1)。その後、父は無事帰国し、郵便局長として故郷の富山市に赴任します。第二次世界大戦の戦況は次第に悪化し、1945年8月1日には、富山市全市がB29の爆撃を受けます。

その夜は、空襲警戒警報のサイレンとなり、父は急遽ゲートルをつけて郵便局の守備に出かけ、家には母親、姉、妹と私が残っていました。B29の爆撃が激しくなり、近所に爆弾の炸裂音が響きだし、火災が発生し始めたために、母は3人の子供をつれて、急いで近くの田んぼへ避難しました。そこには、他の家族も避難していました。空爆は更に激しくなり、ドカーン、ドカーンと地響きする爆弾の強烈な炸裂音が頻繁に聞こえ、近所の家々が次々に火事になるのが分かりました。その火災の激しい熱のためと、空から落ちてくる焼夷弾に対する防護のために母親は大きな布団をかぶり、両側に私と妹を抱えて田んぼの中の水に浸かっていました。姉は、一人で布団をかぶっていたようでした。家々の火災の熱のために、母は時折「組長さん、水をかけてください！」と必死の叫び声をあげていました。組長さんは、軍服のような服をまとい戦闘帽をかぶった元軍人の方で、自分も頭からバケツの水をかぶりながら、田んぼの中の布団に次々に水をかけてく

れました。子供心に、組長さんは男らしく勇敢だと感心していました。布団の下では、限られた狭い空間しかないために、母が時折「息が苦しくない？」と子供達の呼吸を心配していました。たまに布団を上げて、大きく息を吸い込んで、暗い空を恐々と眺めては、B29の連隊の飛来を恐る恐る見て、焼夷弾が当たらないようにと願っていたのを覚えています。B29の空襲は朝まで続き、当時5歳の私には、言葉に表現できないほどの強烈な経験でした。

この経験は、今まで決して忘れたことはありません。でも、家族以外には、口外したことはありませんでした。多分、東日本大震災を経験した子供達も、私の幼少時の経験と同じように、生涯忘れることのない出来事になると思います。人生のスタート時の、このように極めて異常で強烈な経験が、それぞれの個人の生涯にどのような影響を与えるかは明確ではありません。しかし、私にとっては、B29の空爆を生き延びたことが、「いつも力強く生きる、頑張る、誰にも負けない、可能性を信じる、希望を持って生きる」という、私の強い信念の原動力の源となっているのではないかと想像しています。

早朝、B29の去った後、田んぼからでた母親は、焼夷弾の爆発による大きな穴を眺めて、「こんなに激しい空襲では、お父さんにはもう会えない。分かったね。」と3人の子供達に繰り返し何度も言い聞かせていたのを良く覚えています。5歳

の私には、それがどのようなことを意味しているかを理解することはできなかったと思います。しかし、その日の昼頃に父が生きているらしいと聞きました。その後、父が家族の前に無事な姿を見せてくれたのは、とても嬉しかったです。父によると、空襲が激しくなり郵便局の周囲も火災が広がり始めたので、郵便局員たちに避難するよう指示して、自分も神通川を目指して走ったそうです。神通川は、富山市の西側を流れる「鱒の押し寿司」で有名な鱒の獲れる、富山県を代表する大きな川です。川を目指していた途中、若い女性の郵便局員が行く先が分からず迷っていたそうですが、「私についてきなさい」といって一緒に走って避難したために、二人とも無事だったそうです。その日の午後、焼け落ちた富山市街を抜けて、親に連れられ郊外に移動しましたが、燃え焦る家屋や焼死体の転がる町を通り過ぎたのを覚えています。この富山大空襲では、多くの方が亡くなり、富山市の殆どの家屋が全焼したと聞いていました。

その後、大人になり、1969年にはシカゴ大学の研究員として仕事をすることになります。シカゴに移ってから数年後、あの空襲から30年ほどたってから、ショッピングセンタの本屋で何気なくパラパラと本を眺めていましたが、あっと驚く写真(図2)を発見したのです。これは大変な衝撃でした。信じられないことです。それは、あの空襲の時の富山市の写真だったのです。全市が空爆の火災で燃え上がっていた時に、B29から写真